



経営学科の西ゼミが魅力的な個店づくりを提案

鹿児島市との連携事業

経営学科の西ゼミ(担当:西宏樹准教授)が今年度前期に取り組んだ、魅力的な個店づくりを提案する発表会が、9月3日に学内で行われました。この発表会は鹿児島市との連携事業「大学連携による繁盛店づくりコンサルティング事業」の一環で、とんかつ開花亭谷山本店(谷山中央1丁目)、お茶のかおり園(谷山中央2丁目)、ぎょうざのビッグファイブ(東開町)のいずれも大学近隣にある3社と協同で実施。学生はこれまで、現地視察や聞き取り調査を行い、各店舗の強みや弱みを洗い出し、マーケティングの視点を取り入れて分析等を行ってきました。



お茶のかおり園について調査を行った班は、くつろぎやすい店内への入りづらさを弱点と捉え、店舗の前にテラス席を設けて入りやすくする改善案や、夏は抹茶を使ったかき氷、冬は抹茶ラテを販売し、若者などの新規顧客を呼び込む商品提供の提案を行うなど、分析結果をもとに若者の視点を生かした提言を行いました。

本事業に取り組んだ経営学科3年の郷原麻佑さん(鹿児島南高校出身)は、「経営者の熱い思いに触れ、期待に応えるにはどうしたらよいか考えた。最後のプレゼンでは、伝えたいことが伝わるように、店主がイメージしやすいような資料作りを心掛けた。今回の連携事業など、マーケティングの視点を取り入れた実践的な学びを、社会に出てからも役立てていきたい」と成果を実感していました。



カミチクグループの技能実習生と交流会実施



本学学生とカミチクグループの技能実習生との交流会が、本年度から始まりました。きっかけは、同社に就職した本学卒業生である王木さん(中国出身)

が、技能実習生の日本語能力の向上、および日本での充実した生活を送ってもらうための対策を、恩師である国際文化学科の松尾弘徳准教授に相談したことから始まりました。

5月25日に開催されたkick off交流会に続く第2回交流会が6月21日にあり、同社のインドネシア・ベトナム国籍の技能実習生15名と社員2名、本学からは日本語教員を目指す国際文化学科の学生ら11名と教職員3名が参加しました。交流会ではお互いの国のことを紹介したり、ジェスチャーゲームをしたりするなど、会話を楽しみながら交流しました。

3回目は9月24日に本学であり、写真部の学生と一緒に写真撮影交流会を行いました。技能実習生や本学学生ら23名が参加し、4グループに分かれてキャンパス内の建学の碑や野外ステージ、オープンカフェなどで撮影を行いました。

交流会を企画・運営した写真部主将の長濱篤樹さん(国際文化学科3年、松陽高校出身)は、「日本語での説明が通じるか不安だったが、スムーズに進行することができた。最初は風景を撮影していたが、後半は一緒に写真に納まるなど楽しく交流することができた」と話しています。

今後は、日本語の勉強会や日本の正月を体験する新年会などの交流を行う予定です。





NPO法人の 居住支援活動 について学ぶ

社会福祉学科 茶屋道ゼミ

社会福祉学科の茶屋道ゼミ3年生8名が6月9日、地域フィールド演習の一環として、NPO法人やどかりサポート鹿児島についてフィールドワークを行いました。

まず、代表の芝田淳氏（司法書士）より法人設立の経緯や取り組み内容について伺いました。この法人は鹿児島県から居住支援法人としての指定を受けて、住宅確保要配慮者を対象とした連帯保証を行っています。単なる保証とは異なり、地域の多様な方々に支援者となつていただき、利用者の見守りや継続的支援を行ってもらうことで、地域に互助の仕組みを広げる活動を行っています。さらに、「当事者中心」に加え、「当事者が主体的であるかどうか」を考え、互いに助け合う暮らし（互助）の「や



どかりライフ」の提案をしています。

また、同法人の鶴田啓洋氏（精神保健福祉士）から、ソーシャルワーカーが地域移行や地域定着を行う上でこうした地域における仕掛けづくりを行っていくことの意義についてお話しいただきました。

今回の活動を通して、援助をする側とされる側の一方的な関係ではなく、第三者もそこに積極的に交わることで、多様な人間関係とお互い様の役割が生まれ、重層的な支援につながることを発見しました。

引き続き、鹿児島県内の居住支援についてフィールドワークを重ねたいと思います。

文：社会福祉学科・茶屋道ゼミ3年
上田、小野、金倉、坂元、芝、
竹波、田中、前平、横山



避難所での食事や住環境を考える 防災プロジェクトを実施

児童学科 帖佐ゼミ

本学は、防災に関するプロジェクトを実施しています。2年目となった今回は、児童学科の帖佐尚人准教授（教育学）が教員や保育士を目指す学生を対象に実施しました。

6月17日は、3年生13名が、ダンボールベッドや空きダンボールで作る簡易トイレの組み立てを体験。ダンボールベッドは、作成キットを3・4名のグループで最大15分で完成。実際の被災地の状況から、特にトイレの問題は深刻で、水洗トイレは流れなくなるとその後の処理が困難になること、仮設トイレは災害発生から被災地に届くまでに時間を要することがあり、より衛生的で簡単に設置できる簡易トイレを製作できることは重要な知恵となりそうです。身近にある段ボール



2つのみを使い、学生たちは各自で作り方を調べながら完成させました。その後実際の排泄物処理に見立て、水に凝固剤を入れるとすぐに固まり、簡易トイレの手軽さをより実感しました。

6月24日は、3・4年生26名が、耐熱ポリ袋を使って調理する「バッククッキング」を実施しました。各グループ1食分の献立を考案。中には「パンネアラビアータ・オニオンスープ・プリン」といったお酒落なメニューも並びます。耐熱ポリ袋にお米やパスタ、野菜を生のまま入れ、なるべく袋の中の空気を抜いて口を縛ることがポイントで、沸騰したお湯で湯せんし食材に火を通します。袋でまとめて調理ができることは、ごみや洗い物の削減にもなります。いつもと異なる調理法に、麺の茹で上がり具合や調味料の加減などに苦戦していましたが、制約のある中でも、普段と変わらないような食事ができることがわかりました。

